形理

一氣は通塞して、大物は活立す。大物　已に立てば、則ち小は其の中に散ず。蓋し物は體に依り、體は形に成る。形は位に依り、位は物に成る。

外を圓にして内を虚にすれば、則ち以て物を煮る可し。實を内にして外を鋭にすれば、則ち以て甲を刺す可し。同じく是れ鐵なり。と雖も、形異なれば則ち用同じからざるなり。外を圓にして内を虚にすると雖も、而も之を造るに木を以てすれば、則ち水を受く可くして、火に當てる可からず。内を實にして外を鋭にすると雖も、而も之を造るに土を以てすれば、則ち弄す可くして、而も兵と爲す可からず。其の形を同じくすと雖も、而も體異なれば則ち用は同じからざるなり。故に、同一の土泥は、之を瓦にすれば則ち風雨を覆う可く、之を甕にすれば則ち酒漿を盛る可し。同一の木片は、神を模せば而して後に蘋蘩の敬を致す可く、屐を削りて而して後に土泥の汚を避く可し。人造に因りて以て天造を窺う。其の轉持を爲すや、形の直圓に分る。其の山水を爲すや、形の拗突に由る。是を以て、體は必ず形を成すと雖も、而も形は體に非ざるなり。形は必ず體に由ると雖も、而も體は形に非ざるなり。

氣は活するに依りて動なり。物は立するに依りて靜なり。立すれば則ち中外は位を成し、氣體は物を爲す。其の理は靜に於て立す。其の氣は動に於て活す。是を以て氣は理に由りて布く。形は氣に由りて成る。理を以てせざれば、則ち鬱浡の活を運する所莫く、形を以てせざれば、則ち混淪の體を成する所莫し。混淪は坱然を得て居り、鬱浡は衰然を得て行く。而して形中も亦た自から氣物有り。形は理に依りて物を爲し、氣は理に依りて形を布く。故に通經衰衰、塞緯坱坱、形理の祖なり。形理は痕を見して、物に從いて正斜を成す。正中、直圓は正を爲し、規矩は斜を爲す。斜中、塊歧は正を爲し、邪曲は斜を爲す。直圓は正にして形理を混成し、規矩は斜にして形理を粲立す。直矩は理を爲し、圓規は形を爲す。然り而して散ずる者は其の理を邪曲にし、其の形を塊歧にす。坱なる者は圓の

地なり。衰なる者は直の本なり。塊歧は則ち直圓の變なり。故に、直矩の理、散の邪曲、圓規の形、散の塊歧、動なる者は理に循わざる能わず。靜なる者は形を成さざる能わず。夫れ物の物を爲すや、神は體に於て活し、體は神に於て立す。活は没中に見るれば則ち通じ、露中に見るれば則ち動く。立は没中に隠るれば則ち塞り、露中に隠るれば則ち靜なり。其の塞靜は罅縫を没し、通動は條理を露す。通動塞靜は、理に由りて形を成す。理は道路を通じて、而して氣は必ず此に從いて布く。氣の布く所は、正斜自から形を成す。時は經通し、處は緯塞し、體は自ら靜し、氣は能く動く。之を均しくすれば則ち通なる者は天の動なり。塞なる者は天の靜なり。動なる者は物の通なり。靜なる者は物の塞なり。物中、體は天地を成す。故に靜なり。氣は轉持を成す。故に動なり。氣體相い得て、而して天地は動靜す。故に靜なれば則ち天圓地直なり。

處は止りて終に圓なり。時は行きて終に直なり。圓は以て直を持し、中より表裏を分つ。表裏分ち難くして、而して一圓物を混成す。直は以て圓を運す。今より前後を分つ。前後分ち難くして、而して一逝時を滾成す。環守は南北を爲し、運轉は東西を爲す。逝く者は前後を爲し、旋る者は歲日を爲す。故に圓象の旋りて復するは、譬えば循環して走り、往けば則ち復り、復れば則ち往き、終に端緒無きが若し。直象の往きて返するは、譬えば縄を以て之を矩し、縄盡きて直盡きずに、引きて其の止る所を見ざるが若し。動なるや則ち轉規守矩なり。

上下虚實を以て分つは、體の天地なり。虚實相い分てば、則ち直圓混成す。内外轉持を以て分つは、氣の天地なり。轉持相い分てば、則ち規矩は粲立す。是を以て轉持の間、轉は外を爲し、天は其の處を成す。而して象は其の中に居る。持は内を爲し、地は其の物を爲す。而して質は其の上に居る。混成より之を觀れば、則ち持直は外に向いて圓なり。粲立より之を觀れば、則ち竪矩は中を貫いて規なり。天地を分てば則ち轉持は合す。天體は自から虚なり。地體は自から實なり。轉を貫いて直、持に徹して圓なり。動を以て形と爲さず。直圓は混成す。

轉持を分てば則ち天地は合す。轉氣は自から精なり。持氣は自から麁なり。地を貫いて矩を爲し、天を轉じて規を爲す。靜を以て形と爲さず。規矩は粲立す。靜は動中に塞し、動は靜中に通ず。動を容るるの靜は、靜にして跡無し。故に之をして動かしむれば、則ち東西を碍てず。升降を妨げず。靜を用うるの動は、動きて處を守る。故に之をして止らしむれば、則ち南北は軸を爲し、内外は位を守る。天地の性。二は能く合し、一は則ち能く分つ。天地は靜を成し、轉持は動を成す。而して動靜は同じく其の形を圓にし、同じく其の理を直にす。唯だ其の理は、動すれば則ち斜なり。靜すれば則ち正なり。然らざること能わずして然り。

圓なる者は形なり。而して動の體を成す者なり。故に塊然として能く物に於て形す。故に其の内は包んで以て容るるに足る。其の外は循いて以って環る可し。塊歧方扁は、種種の異形と雖も、而も居る者を内に統べ、行く者を外に環らす可きに於ては、則ち同じく塊然の體を圓に歸するを失せず。直なる者は理なり。而して氣の路を成す者なり。故に邃乎として能く物に於て理す。故に其の中は、湊まるに足り路するに足る。其の外は、轉ず可し、持す可し。故に横竪邪曲は、千萬の態有りと雖も、而も活を本に畜え、氣を末に施せば、則ち邃乎の理を直に歸するに失せず。此の故に直は氣を體に於て運す可く、圓は形を體に於て成す可し。是を以て、道は理に由りて有る。道卽理なるに非ざるなり。體は形に由りて成る。體卽形なるに非ざるなり。姑且　小を以て大を喩えんか。夫れ動の身首羽毛に於ると、植の根幹華葉に於ると、體は則ち相い似たり。禽を爲し獸を爲し、艸を爲し木を爲し、散じて萬品を爲すに至りては、則ち何を以てか分つを爲さん。蓋し形の異を爲すや、氣の布に從う。氣の布く所は、乃ち理の在る所なり。理は動に於ては脈と曰い、植に於ては文と曰う。玉に理と曰い、石に砌と曰う。山水に脈と曰い、轉持に規矩と曰う。活性は此より運し、形體は是に於て成る。氣は動に依りて通じ、體は實するを以て露す。位は靜に依りて立ち、形は虛するを以て成る。既に是れ靜虛なれば、

形位は奚れを以てか見る。夫れ行路の人の若き、高下は其の地に由る。而して、路　圓なれば則ち行も圓なり。路直なれば則ち行も直なり。是に於て圓は運轉の爲す所に非ず。直は升降の爲す所に非ざるを觀る。理は則ち正直斜矩なり。形は則ち正圓斜規なり、故に形は理の成る所なり。理は形の立つ所なり。是を以て、理　正なれば形も正なり。直は圓を成す。理　斜なれば形も斜なり。矩は規を成す。故に天地の圓は以て直を含み、轉守の規は以て矩を抱く。

圓なる者は圓にして圓なり。其の形は毬の如し。無垠は以て其の大を極む。直なる者は直にして圓なり。其の形は栗毬に比す。規なる者は圓にして扁、其の形は輪の如し。運轉は以て其の横を成す。矩なる者は直にして立、其の形は車軸に比す。幹守は以て其の竪を成すなり。持は垠る所有るを以て、而して直動の路は、轉に至りて盡る。而して其の精靜は轉持と隔てず。轉は止る所有るを以て、而して平運の路は持に至りて無し。而して其の麁動は能く横竪を分つ。圓は能く直と混成す。精にして靜なり。矩は能く規と粲立す。麁にして靜なり。直は中より外を貫ぬけば、則ち止りて靜なり。矩は端より中に徹すれば、則ち旋りて動なり。故に矩は軸を爲す。規は輪を爲す。規と矩と、同じく其の理を直にす。圓は外を爲し、直は内を爲す。圓と直と、同じく其の形を圓にす。其の形を混成すれば、則ち經は衰として緯は坱たり。未だ直圓の痕を見さず。其の物を粲立すれば、則ち弥いよ規矩の體を變ず。

體は以て虚實し、機は以て動靜す。機體の間、性は水火を成し、體は山壑を成す。星辰は其の上に横して、而して其の行を衡從にす。動植は其の下に立ちて、而して其の體を本末にす。山なる者は塊然の體なり。其の形を拗突にす。壑なる者は歧然の體なり。其の理を邪曲にす。夫れ物の成る所は、性は活して氣は運し、體は充ちて形は成る。氣は徒らに運せず。理に由りて運す。理なる者は、氣運の通路なり。理に随いて氣を布き形を成す。大物　混然として圓を爲す者は、其の理の直を以てなり。合すれば則ち圓成りて、而して直は其の中に立つ。分るれば則ち直理

して、而して圓は其の表に成る。運する者は活の性なり。資りて始まる所有り。給して繼ぐ有り。故に本は中に歸し、中は外に之く。是を以て地は塊然たる一毬なり。其の氣は發收す。發收は代るがわる用して一噓し一噏す。發收は圓に從い、噓噏は直に從う。噓噏に從いて南北の用を見す。

全物、上下は中外と伴いて、而して能く圓を成す。故に之を下に資り、以て之を上に發す。地用は二にして相い闕く。面背は南北に於て更るがわるして、而して能く直を爲す。故に之を向う所に用いて、以て之を背く所に廢す。一は則ち全なり。二は則ち相い闕く。是を以て一體は必ず二用を爲す。故に同じく是れ一日行。以て經緯の行を分つ。經行は、或いは順行し、或いは逆行す。緯行は、或いは北行し、或いは南行す。是を以て一塊の大物は、氣の資る所、圓は中外を有し、用の成る所、直は面背を分つ。中外なる者は定位なり。能く其の處を定む。面背なる者は變用なり。或いは面し或いは背く。故に其の緯に於て成る者は、半面を北と爲し、半面を南と爲す。經に於て成る者は、半面を晝と爲し、半面を夜と爲す。其の一直の貫ぬく所は、端を兩極に於て露し、一半の分かつ所は、界を中線に於て爲す。故に日は其の道を側てて。而して、南一北す。一極地　晝なれば、則ち一極地は夜なり。一邊境　夏なれば、則ち一邊境は冬なり。一面一背、晝夜冬夏代がわる行わる。中界兩規、西轉東運、地は止りて動かず。將に東西する者を迎えんとす。面は日の照を受けて以て晝と爲し、背は日の照を蔽いて以て夜と爲す。面背の間に立てば、則ち一以て旦を爲し、一以て暮を爲す。故に其の體は則ち一なり。其の用は則ち一なり。故に圓は中外を成し、直は面背を分つ。夫れ地の一圓塊にして、萬物は環りて之に居る。氣は上を爲し、質は下を爲す。轉は外を爲し、持は内を爲す。此の故に、升る者は天に之き、降る者は地に著く。方を東西を以て定め、位は上下を以て立つ。東西は規に於て分れ、上下は直に於て分る。而して圓なる者は直なり。直なる者は圓なり。身を北極下に置けば、則ち南地は背を爲す。身を南極下に置けば、則ち北地は背を爲す。是に於て、背地は倒懸の若く、中界は側立の若し。轉環の間に、倒側相い移り、倒側相い成るは、二用有るに由る。倒側の

相い同じきは、體を一にするを以てなり。圓成れば則ち直は其の中に在りて、圓能く直を成して、而して形は栗毬を爲す。直立てば則ち圓は其の外を成して、矩は能く規を爲して、而して理は車輪を爲す。故に規矩を以て直圓を譬えれば、則ち直の地を持するは、車輪の外を環りて、而して、　輻　の散ずること能わず、倚ること能わずして、盡とく軸に向うが如きなり。直の天を承くるは、　輹の　中に在りて、而して軸の陥ること能わず、蟄ること能わずして、齋しく輪を承くるが如きなり。故に天地を以て之を觀れば、氣上質下なり。己れを以て之を觀れば頭上足下なり。是を以て轉なる者は通の體を露すの處、持なる者は塞の體を示すの處。一一の分るる所なり。通は持を隔てず。塞は轉を遺さず。氣物の合する所なり。

一機　粲然として規を爲す者は、其の理の直を以てなり。合すれば則ち矩立ちて、而して規を其の外を成す。分るれば則ち矩　理して、而して規　其の動に範す。動なる者は運の露なり。守する所有りて止る。轉ずる所有りて循る。故に守は内を持し、轉は横を爲す。是を以て天は混焉たる一氣なり。其の氣は運轉し、運轉は互いに用して、一守一環なり。運轉は規を爲し、環守は矩を爲す。運轉に從いて東西の用を見す。故に天地は靜にして、而して形理直圓なり。轉持は動にして、而して形理規矩なり。天なる者は運轉環守、一平・直なり。地なる者は水燥土石、一俯一立なり。天體は混焉たる一氣なり。地體の其の表を塊にするに於て異なる。故に天なる者は混圓中、歧して其の理を横竪にし、地なる者は一塊表、斜に其の形を歧歧にす。故に象質の行は、衡從本末を分ち、山壑の體は、拗突邪曲を分つ。天轉地持は物の體を爲し、水燥日影は性の物を爲す。體物は露地に居り、性物は没地に居る。故に象も亦た直圓を成して、而して規矩を天地に分つ。質は自から俯立を爲して、而して直圓を天地に合す。氣體は直圓を以てして立ち、象質は横竪を以てして成る。

性は則ち会易なり。體は則ち氣物なり。而して会易と氣物と、各　同じく天地萬物を具す。氣物を以て会易を統ぶれば、則ち中外を一にして、而して彼此混成す。会易を以て氣物に比すれば、則ち中外を各にして、而して彼

此粲立す。是を以て體に成る者は天地、性に成る者は日影、天地なる者は天轉地持なり。日影なる者は氣收象發なり。日象影氣は、下、水質燥氣と偶す。故に日影は天地と勢を張ると雖も、而も影は收め日は發し、而して日は弧中に居りて、地外を繞る。水は潤い燥は煦め、而して水は弦中に就きて地表に浮く。華は天間に充ち、液は地表に漾う。象質は　各　其の氣に偶して会易の物を見す。然りと雖も水燥は天地に合し、日影は天地に比すれば、則ち日影能く天地と勢を張る。是に於て天中の萬物は、日影を得て繫り、持中の萬物は、水燥を得て列す。絪縕摩盪して、上は則ち星辰を懸け、其の行を日影の間に於て衡從にし、以て能く循環す。下は則ち動植を化し、其の體を水燥の間に於て俯立し、以て能く鱗次す。是に於て動植の物は形を塊歧に資り、愈いよ其の塊歧を變ず。行を邪曲に資り、愈いよ其の邪曲を變ず。蓋し形位は成具に成る。小物は大に資りて、以て別に天地を開く。是を以て直圓は理形の正に於て出で、邪曲は理形の變に於て極す。

正に直圓規矩有り。斜に塊歧邪曲有り。塊なる者は歧せずして、而も未だ正圓を得ず。歧なる者は塊せずして、而も未だ正矩を得ず。故に天の運する所は其の行を歧にし、地の立する所は其の體を塊にす。星漢は最も高く、其の行は東規に循う。日月は最も卑く其の行は東規に歧す。坱坱の間、天形は正圓にして、水燥は漸や之を假る。地形は拗突を以て文章を爲す。望遠鏡の窺う所、日月の體は文章を有すること地の如し。是に於て天象と雖も、而も漸みて已に地に近ければ、則ち日月は其の體を塊にし、其の行を歧にす。其の體を塊にし、其の行を歧にすと雖も、地中の塊歧と同じからざる者は、天地の大分なり。故に輪軸既に設け、方處既に定まる者は、形の斜なり。斜中に之を分てば、西規北矩、高を以てして正なり。東規南矩、卑を以てして斜なり。日體は塊然として、其の行は又た盈縮の輪を架す。月體は塊然として輪外に遲疾し、輪輪相い架す。日に著くの諸辰は、皆輪、輪を架く。　各　自から機軸を持して、星漢の脈絡を通ずるに異なるなり。唯だ月の最も歧行の多きは、最も地に近きを以てなり。斜なる者は地物の形理なり。地中と雖も、天に親なる者は自から正を含む。人目を以て之を言う

に、四邊茫茫として、視る所は則ち一圓象なり。萬里歷歷として、指す所は則ち一直線なり。是を以て光耀の及、聲臭の至は、東西南北に徧徹す。徧なる者は圓の勢なり。徹なる者は直の力なり。

是の故に大物は天地なり。一機は轉持なり。天氣地體は、同じく其の體を圓にして、而して大小を分つ。轉軸持輻は、同じく其の氣を直にして、而して長短を分つ。運轉同規は平側を分ち、環守同矩は立倚を分つ。衡從は同じく横にして、而して經緯の別を有し、本末は同じく竪にして、而して上下の異を有す。塊歧は同じく物にして、而して俯立の分を有す。邪曲は同じく理にして、而して直圓の道を有す。故に大物の成は、小は居り大は容る。短は止り長は守る。長矩は其の位を守りて旋り、大規は其の方を轉じて旋る。天圓は裏みて地を覆い、地直は立ちて天を載す。一は能く分れ、一は能く合す。直は圓を貫き、圓は直を統ぶ。直圓は天地の靜形を成し、規矩は天地の動形を爲す。内外は分る。經緯は立つ。

外の位は圓にして容れ、内の位は圓にして居る。經の方は直を以て規を爲し、緯の方は直を以て矩を爲す。直圓は靜にして體を没し、規矩は動にして形を見す。虚中の形なり。横竪の理を成し、塊歧の形を爲すは、實中の形なり。景影は處を爲して、天物は此に居り、水燥は處を爲して、地物は此に居る。天物は塊然たり。地物は歧然たり。天物は乾燥し、虚中を曲行す。地物は潤溼し、實中を邪行す。轉中、守矩は立ちて緯位を定め、平に西の經紀を轉ず。環矩は倚して緯位を運し、側して東の經象を紀す。

經なる者は東西の平圓なり。緯なる者は南北の守直なり。統ぶれば則ち竪直は自から定り、平圓は自から轉ず。分かてば則ち守りて西轉し、環りて東運す。是に於て東西は斜絡し、南北は出入す。氣象の錯綜する所なり。守る者よりして環る者を觀れば、則ち環る者は斜なり。環る者よりして守る者を觀れば、則ち守る者は斜なり。而して環りて運する者は卻って遲く、守りて轉ずる者は卻って疾し。

持中、氣は圓にして、竪は水燥の物を通ず。質は平にして、横は山壑の體を列す。蓋し天は能く散ず。故に諸象は

散布し、地は能く結ぶ。故に諸質は結聚す。散布する者は自から成る。故に其の形は直圓なり。其の行は平側なり。結聚する者は倚りて成る。故に其の形は塊歧なり。其の行は邪曲なり。是を以て轉の内、地の上、人と物とは天地を此に開きて、皆な覆載の間に遊ぶ。風は俯し恬は立し、海は拗し山は立す。而して堅生は塊然として體を閉し、輭生は歧然として體を開く。開閉は生を別にし、邪曲は變を盡す。

一形は正斜を分つ。正なれば則ち直圓は規矩を含み、斜なれば則ち塊歧は邪曲を兼ぬ。正斜は錯綜し、萬形は變を極む。是を以て植は竪立の正を得ず。以て邪の態を盡す。動は圓轉の正を得ず。以て曲の態を盡す。然り而して天物の邪曲は、行に多にして形に微なり。地物の邪曲は塊歧と相い配す。夫れ萬の形は、天に居る者の塊然たる、地に居る者の歧然たる、何を以てか其れ然らん。天に在る者は、散中に象を聚めること、猶お水を噴きて許多の圓滴を得るがごとし。斜と雖も而も諸象は塊を爲す。地に依る者は、結中に體を凝らすこと、猶お壁を碎きて小大の缺片を得るがごとし。成と雖も而も歧を極む。天に在る者は、塊然として圓を爲して、而して明なる者は高く、一列に平布す。暗なる者は卑し。參差に重畳す。地に在る者は、歧然として變を爲して、而して植なる者は地に著き、平布して位を守る。動なる者は天に居り、位序して變り易し。是に於て地上の萬形は、峙を爲し、陥を爲し、扁を爲し、頗を爲し、橢を爲し、稜を爲し、方を爲し、角を爲し、邪を爲し、曲を爲し、以て著き、以て依り、以て纏い、以て蔓り、以て倒れ、以て正し、以て長く、以て短し。體行の間は、其の變を盡くさざる所莫し。正圓は平を用いず。規は能く平を爲す。正直は竪を用いず。矩は能く竪を立す。平圓ならず之を曲と謂う。竪直ならず之を邪と謂う。地なる者は、體を以て　輹　と爲す。故に地は横俯し、氣は竪立す。地は拗して水の平布を容れ、突して燥の混圓に居る。艸木は邪にして立ち、鳥獸は曲にして俯す。然り而して星辰の行は轉に在りて宛轉し、渾天の形は地を裹みて直圓す。圓なれば則ち地に在る者は皆な天に在る。天に在る者は皆な地に在る。

是に於て運轉環守、噂喩發收は、天地の動機を見す。中外上下、東西南北は、天地の靜位を立す。天地轉持、水火山海は、以て物の體を成し、直圓規矩、横竪塊歧は、以て天地の形を成す。唯だ風雲水火土石は、體を有すと雖も、而も未だ定形を持せず。是を以て分かてば則ち斜斜錯綜し、合すれば則ち直圓混成す。

人と物と、同じく情欲意智を具す。而して思惟分辨の智は、人を最と爲す。是に於て唯だ人のみ天地を知るに足る。唯だ人のみ天地を行くに足る。直圓規矩に資ると雖も、歧然の身を以て邪曲の行に依る。天地は正邪を有す。故に人物は正邪に資る。天地　正を有せずんば、則ち物は焉んぞ正を有せん。天地　邪を有せずんば、則ち物は焉んぞ邪を有せん。動は必ず方を有す。人は得て之を道とす。天地は規矩を有す。人は得て之を則とす。故に圓は規を爲し、直は矩を爲す。圓の機や動なり。直の機や止なり。圓の力や轉なり。直の力や持なり。圓の體や統なり。直の體や分なり。圓の用や混なり。直の用や粲なり。圓の化や徧なり。直の化や徹なり。圓の才や容なり。直の才や斷なり。是を以て、靜にして圓なる者は湛なり。靜にして直なる者は皦なり。動にして圓なる者は安なり。動にして直なる者は正なり。思にして圓なる者は靄なり。思にして直なる者は敢なり。交にして圓なる者は愛なり。交にして直なる者は敬なり。望にして圓なる者は溫なり。望にして直なる者は莊なり。辞にして圓なる者は婉なり。辞にして直なる者は切なり。是を以て、則を有し、理を有し、紀を有し、章を有す。位序粲然たる者は、直の事なり。詰る可からず。捉う可からず。動きて愈いよ變じ、出て愈いよ窮まらず。之を措きて其の處を知る無し。之を置きて其の跡を見さず。變化混然たる者は、圓の事なり。是の故に直の至は、天も之に違うこと能わず。圓の至は、神も之を窺うこと能わず。夫の圓行直止を觀るに、圓は規を爲し、直は矩を爲す。行止の規矩に中るは、聖人の事なり。圓ならざれば則ち曲なり。直ならざれば則ち邪なり。邪曲は則ち小人の事なり。是を以て智は圓ならざれば、則ち事物に通ぜず。幽明を辨ぜず。物我を隔てて是非に惑う。行は直ならざれば、則ち外飾り内疚し。此に縮し彼に躓く。智は直ならざれば、則ち姦邪放僻　之を謀る。行は圓ならざれば、則ち

從容として物に役せられざるを得ず。粲立は痕を著し、混成は跡を没す。混にして能く通じ、活にして能く神し、窮まらずして變ず。痕無くして化す。混たらざれば則ち通ぜず。通ぜざれば神ならず。神ならざれば變ぜず。變ぜざれば化せず。化せざれば物を成さず。物を成さざれば奚れの事物か之れ有らん。